

[4]

氏名(本籍)	土井 康弘 (富山県)		
学位	博士 (学術)		
学位記番号	博乙第 34 号		
学位授与年月日	平成 14 年 7 月 31 日		
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当		
論文題目	幕末尾張藩洋学者 伊藤圭介の研究		
論文審査委員	(主査)	教授	大沢 眞澄
		教授	平井 聖
		教授	増田 勝彦
	獨協大学	教授	加藤 僖重

論文要旨

伊藤圭介(享和三(1803)年~明治三十四(1901)年)は、尾張の町医師時代に文政十(1827)年から同十一年まで長崎出島オランダ商館長付医師シーボルトに師事し、その成果として同十二年に『泰西本草名疏』を出版しリンネの植物分類を日本で初めて紹介したことで夙に有名である。また明治三(1870)年明治政府より招聘され、明治十九(1886)年に東京大学教授を辞すまで、多年にわたる植物学に関する研究教育活動を評価され、明治二十一年日本初の理学博士を取得した我が国の理学界の先駆者でもある。しかしながら上記二時代の間の弘化四(1847)年から明治三年まで圭介は尾張藩医を勤め、藩内だけでなく幕府機関蕃書調所でも洋学研究教育活動を行ない、日本の近代化に大きく寄与したが、この時代の圭介について省みられることは少なかった。

本論文は、日本の近代化過程を解明する一つのアプローチとして、急速に西欧科学技術を受容した江戸時代後期から明治初期を生きた洋学者伊藤圭介に注目し、その未知とされる尾張藩医時代に行なった洋学研究教育活動の解明を主題としたものである。その際同人の活動の主体から内容を三期間に分け、四部六章で構成した。

第一部は第1章のみで構成し、伊藤圭介が藩医となった弘化四年から、安政六(1859)年藩の公的洋学研究教育機関「洋学所」の創設に携わるまでの期間を扱った。この間圭介は対外的危機を回避するため、藩の洋学研究教育を推進する高級藩士上田仲敏をたすけ海外事情と西洋兵学に関わる対外情報を、集積地である長崎から入手し西洋兵学研究に邁進した。その際圭介は、嘉永二(1849)年に長崎在住の水戸藩医柴田方庵と知己を結び同人から情報を得たが、嘉永四年頃から嘉永七年二月まで同地に自身の弟子服部元民が遊学している期間は専ら服部に依存した。しかし服部が帰国し柴田方庵との情報交換を再開したが、次第に藩内で上田仲敏、大道寺家家臣水野正信、江戸尾張藩邸の間瀬権右衛門などから情報を間接的に入手するに止まるようになった。

また第二部は、文久元(1861)年十月から同三年三月まで尾張藩籍のまま伊藤圭介が蕃書調所および改称された洋書調所の物産方で行なった研究教育活動を2から4の3章で解明した。

第一に第2章では、圭介が研究に携わった物産方の陣容、研究の実態と研究を遂行するために圭介が行なった活動を幕末の政治状況に関連づけて明らかにした。とりわけ圭介が文久二年十二月に支配側に進言した「物産学ニ付存寄之趣申上候書付」から、物産方の主要業務が舶載物産の調査と物産用語の翻訳であり、併せて物産方の新規事業案として圭介が有効植物の培養と博覧会構想につながる物産会の開催などの近代的な構想を抱いていたことを見出した。さらに圭介はこの進言で領土問題の顕在化する蝦夷地および小笠原の物産研究を課題として掲げたが、その理由を物産収集家成瀬善四郎および織田宮内小輔、蝦夷地の専門家松浦武四郎、小笠原回収の指導者である幕府目付服部帰一との出会いと関連づけた。またこれらの出会いで圭介が、物産学と領土問題ひいては政治問題と結び付けて考えるようになり、対外情報の集積地である勤務場所の蕃書調所および洋書調所で一時離れていた対外情報の収集を再開し、文久元年、同二年にそれぞれ出発した竹内遣欧使節、オランダ留学生の動向にも関心を抱いたと位置づけた。

このように圭介は幕府機関に出向し物産学研究の改善ならびに発展のため尽力したが、尾張で洋学行政を圭介とともに担っていた上田仲敏が病気になり、文久三年四月尾張に帰国しそのまま「洋学所」の運営ならびに洋学行政を掌握することとなった。

蕃書調所出役に際して圭介は、子息謙三郎のほか門人の田中芳男を同行させ、のちに鈴木容庵、中野延吉、横江八百太郎の門人も同居したが、圭介および門人の動向を検討し門人の江戸行きの目的を明らかにしたのが第3章である。すなわち圭介の監督下で門人は学業に励んだが、田中芳男が物産学のみを学習し、のちに物産方に出役したことから、同人の江戸行きの目的を物産方勤務とした。また田中以外の人物は西洋医学およびオランダ語や英語を学びもしくは学ぼうとしたことから、これらの人物は尾張で「洋学所」ひいては藩の洋学研究教育に貢献するため江戸で学習に励んだものとした。

さらに第4章では、物産方出役期に圭介が知己を得た人物の中で北方研究の第一人者である松浦武四郎を取上げ、両者の交際状況を考察した。その際圭介は松浦に尾張で親交のあった水野正信を紹介し、両者が積極的に書簡の遣り取りを行なったことを考慮し、両者の関係から圭介と松浦の交際を推察するという形態をとった。水野と松浦は共通の関心事である蝦夷地について書物および同地の意見交換を行なったが、両者は蝦夷地がロシア領土になることを危惧するなど、対外的危機に敏感であった。そのため両者は蝦夷地という共通関心だけでなく国内外の不穏な情勢に関する情報を交換するようになっていく。むろん水野と松浦と親しい関係にあった圭介も二人の交際から影響を受け、とりわけ領土意識が芽生えたものと考察した。

なお第四部第6章には、物産方勤務期に圭介が尾張の家族に宛てた書簡としてまとまって存在する国立国会図書館蔵の「書簡集」を全文翻刻し収録したが、これらはおもに第二部の資料として用いた。

最後に第三部は第5章の一章による構成であるが、尾張藩で成立した公的洋学研究教育機関「洋学所」を圭介が中心になって綱領を作成し、実際にどのように運営されていたかについて、その陣容および研究教育内容を中心に明らかにした。すなわち安政六年に藩士戸田五郎兵衛、蘭方医服部元民と中野静載とともに綱領を作成し、同人らを「教授方懸り」に任じ、翌安政七（万延元）年に上田仲敏邸にあった「洋学館」を同地で発展させ「洋学所」を創設し、自身は上田と「総裁」

として同所を統括したことを明らかにした。

以後一時文久元年から三年まで圭介は幕府勤務で尾張を空けたが(第二部)、文久三年四月に帰国し、人事の補任ならびに教育内容の改革を行なう。前者については「教授方懸り」の戸田五郎兵衛の辞任を中野延吉で、上田仲敏没後の「総裁」を服部元民で補任するが、藩内で「尊皇国学派閥」が勢力を強めるなか紆余曲折する。圭介は上田邸から「洋学所」を自宅に移したが、「尊皇国学派閥」の対抗勢力である「佐幕洋学派」も復権を画策し、慶応元(1865)年「洋学所」の支配側は同所を藩校明倫堂に移転させようとしたが果たされなかった。そのようななか、圭介は元治元(1864)年から慶応元(1865)年まで第一次長州征伐で、実質的な運営を担っていた服部元民が慶応二年に第二次長州征伐に同行したことで「洋学所」の運営は成り立たなくなったようである。結局慶応三年「洋学所」は藩主側に書物を返却し、終焉を迎えたものと思われる。これにより圭介は尾張藩の洋学行政を解かれたことになるが、同人には医師としての業務が残っており、父慶勝に代わり禁裏守衛に赴く藩主義宣に随行して慶応四年に京都勤務に就いた。

以上本論文において、町医師時代と明治政府奉職後の中間にあたる尾張藩医時代に、洋学研究教育者として伊藤圭介が行なった活動の実態を明らかにした。換言すれば幕末から明治への激動期に、洋学者として尾張藩、幕府蕃書調所を舞台に对外情報の入手、広い視野での物産研究、洋学者の養成、領土問題など西欧文化の受容に懸命に努力した実像が解明できたことになる。これを受け今後の伊藤圭介に関する研究として、明治政府奉職まで続けた医師としての伊藤圭介像、生涯を通じて植物学を研究するに至った原動力である本草学研究、そして植物学研究を中心とする明治以降の活動の解明が課題として挙げられる。

審査報告要旨

本論文は「幕末尾張藩洋学者 伊藤圭介の研究」と題し、序、本文3部5章、翻刻編1部1章、結論と今後の課題から構成されている。

「序・問題の所在」では、幕末期における西欧文化の受容過程の実態はどのようなものであったのかを、蘭学者として出発し、明治期にはわが国理学界の先駆者として高名な伊藤圭介(享和3年(1803)～明治34年(1901))の尾張藩医時代を追跡することにより解明しようとする問題提起である。

第一部第1章：伊藤圭介は尾張藩医として兵学・植物学を中心に長崎からの海外情報の収集につとめているが、この時期に得た情報の内容およびその間の尾張藩高級家臣上田仲敏、年寄大道寺家家臣水野正信、門人服部元民らとのネットワークが具体的に論及され明らかにされている。

第二部第2章：蕃書調所物産方(のちの東大理学部植物学科などへ)で伊藤圭介は、船載物産の調査などを行うかたわら、研究環境の整備などを行っている。とくに、文久2年12月に書き上げた「物産学ニ付存寄之趣申上候書付」には、竹内遣外使節やオランダ留学生への洋書収集の依頼、自然史関係標本類の整備、草木類の培養、日本各地での物産調査、物産会・研究会の開催、蝦夷・小笠原ならびに海外物産の人手など献言し、その内容の先駆性は注目すべきものであると評価している。このさいの情報収集活動から領土意識が芽生え、物産方の業務内容が政治・経済・

外交と密接な関係を有することを明らかにした。

第3章：伊藤圭介は蕃書調所物産方出役期に尾張藩から多くの人物を同行し、また同居させ、藩での医学・洋学研究教育に携わらせるために監督し学習させた経過が詳細に調査されている。とくにその内の田中芳男は、圭介が継承者として期待し、物産方で学習させた人物で、この圭介から田中へと連なる人脈は現在の博物館学の伝統として存続することになる。

第4章：伊藤圭介は、物産学研究から日本の境界地（蝦夷地・小笠原）へ関心を持つようになり、松浦武四郎と出会う。圭介は松浦に水野正信を紹介し、両者の交際は活発となる。圭介は日本の周辺地域の領土問題についても考えを進めるようになるが、水野と松浦の間の史料から圭介と松浦との交際を推察するという方法をとってこの間の圭介の状況を明らかにしている。

第三部第5章：伊藤圭介の蕃書調所辞任後の尾張藩洋学所の運営に尽力した時代を考察している。洋学所の名称の問題から、人事、具体的運営構想、教育内容、移転の問題、藩内派閥による確執、その終焉までが具体的に明らかにされている。

第四部第6章：第二部の史料として用いられた圭介の家族宛書簡全文の翻刻である。

「結論と今後の課題」では尾張藩洋学者としての伊藤圭介像を、1) 尾張藩医となった弘化4年(1847)から藩の洋学研究教育機関「洋学所」の創設に関係する安政6年(1859)まで、2) 幕府蕃書調所出役期、文久元年(1861)から同3年(1863)まで、3) 尾張洋学所総裁在任期、安政6年(1859)から慶応3年(1867)までの3期に大別して、西欧文化の受容という観点から激変する時代を背景に詳細に論及・解明されている。加えてさらに考究すべき残された問題を挙げている。

本論文は、この時代に生きた一人の洋学者、尾張藩士伊藤圭介に焦点をしばり、その未解明な時期を海外情報の収集、蕃書調所での物産学研究、多岐にわたる人的環境・関係、領土問題、尾張藩洋学所の経営などの諸点から、その時代背景とともに新史料も含む各種史料を利用して具体的に解明している。

伊藤圭介は享和3年(1803)尾張の出身で、明治34年(1901)に没するまで、その長い生涯はわが国の西欧文化の受容と密接に関連する時代と直結していた。若くして長崎に遊学しシーボルトに師事、ツェンペリーの『日本植物誌』の翻訳『泰西本草名疏』でリンネの植物分類を本邦で初めて紹介、本草学の旗手と目された人物である。蕃書調所時代には、再来日のシーボルトと会うことにもなる。明治に至ると東京大学教授、最初の理学博士の一人となり、後に男爵を受爵する。このように伊藤圭介は若年にして西欧博物学研究の第一線に立ち、明治時代には栄光に包まれるが、その中間の過程、尾張藩医の時期は従来調査研究されることがほとんどなく、その詳細は不明のままであった。本論文は伊藤圭介のその時代に注目しその間の動向を明らかにしたもので、幕末期の西欧文化受容の実態の解明を洋学者個人の生き方を基に、一つの雄藩と幕府との関連を軸に展開したその着眼点、研究方法はきわめて興味深いものといえる。

本論文は以上の点より、日本の近代化過程に関する史的発展の事例として、学術上貢献するところが大きいと判断される。よって審査員一同は、本論文を博士(学術)の学位論文として十分な価値があるものと認めた。